

佳作

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「兄が導いてくれた道」

静岡県立韮山高等学校2年 吉田 美来希

「美来希ね、お医者さんになって圭ちゃんみたいな人を助けるんだ。そしたらカッコいいでしょ」

保育園のころに、「いしやになりたい」と書いた七夕の短冊が、今でも部屋にかかっているので本当に私はそんな大きな夢を言っていたようだ。そのころからずっと私の夢は医療関係の仕事に就くことだ。

圭ちゃんとは、誕生日が同じ8歳ちがいの私の兄のことである。でも私が兄について知っているのは、名前と誕生日と、写真の中の顔だけだ。私が2歳の時に兄は病気で亡くなった。何一つ記憶はない。それなのに「美来希ちゃんって兄妹いるの？」って聞かれると、私は必ず「兄がいました。今は一人です」と答える。兄のことは言わないで、「一人っ子です」と言えば、聞き返されることもないだろう。でも圭ちゃんには私の大事な家族の一員だから、私は必ずそう言う。

私の母は兄を亡くしてから看護師になった。家族を亡くして、他人の命を救う仕事をしようと思った母はすごいと思う。母は、兄の主治医の先生や看護師さんが、願書をとってきてまですすめてくれたから、仕方なく受験したと言っていた。でも卒業式では答辞を読んだと聞いて、私を育てながら努力して看護師になったのだらうと想像できる。そんなに頑張れたのも、圭ちゃんがいたからだと思う。そんな母の姿を見てきたから、私も小さいころから知らず知らずのうちに、医療の道を志すようになったのかもしれない。

今年の夏休み、私は一日ナース体験に参加した。多くの体験の中で、一つの気づきがあった。それはALSの患者様の昼食介助をした時であった。その方は病気のため、自力で食事をするのができなかった。会話の中で、「今の自分は何もできない。生きていられるのは看護師さんのおかげだよ。本当に感謝しているよ」と笑顔で話してくれた。

ALSがどんな病気なのかは少し知っていた。きつとつらいこともたくさんあったと思う。その中で私に実習の機会を与えてくれて、笑顔で穏やかに話をしてくださった。何もできないと言っていたが、私にとっては人生勉強をさせていただき、先生の方であった。もし自分が患者様の立場だったら私はあんなに穏やかに話ができるかと考えさせられた。

命を扱う仕事は他のどんな仕事よりも大変で難しいと思う。ミスにより命を落とすことにもなりかねない。指導してくださった看護師さんが、「私はプライドを持って仕事をしています。そうでないで、患者さんはもっと不安になるでしょ。チーム医療の一員として病院の職員一人ひとりが、頑張っています」と言っていた。自信に満ちて頼もしく感じた。

実習から帰って母に看護師としてのプライドを聞いてみた。「知識、技術を習得しているのは当たり前。それだけでは良い看護師ではないと思う。患者様のつらさを少しでも分かろうとする気持ちをお忘れないうことかな」と言っていた。だから母は、かかわったすべての患者様が一回でも多く笑顔になれるような看護をしているとも言っていた。その時ばかりはいつも家で見ている母とは、少し違っていた。こよく見えた。

私は今まで医者や看護師は一方的に患者様のお世話をしていると思っていた。しかし本当は、患者様から教えられることが多いのだと気づかされた。看護の道を志す人は人間愛がなければいけないと言っていた人がいた。「人間愛って難しい」と思った。

しかし、母や看護師さんたちを見ていて、一方的な愛ではなく、相手と共に築いていくもののように思えた。まだまだ未熟な私ではあるが、医療人の一員として、社会に貢献していけるように今自分ができていることを一生懸命頑張っていこうと思う。そんな思いを強くした高校2年の夏休みであった。